

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 品川 大輔 印

学位申請者 陶 天龍（タオ・ティアンロン）

論文名 南琉球宮古語久松方言の文法

< 審査の経過と結果 >

審査委員会は、学内指導教員の品川大輔を主査とし、同じく学内指導教員である山越康裕氏、主任指導教員の花蘭悟氏、学外からは琉球諸語研究を専門とする下地理則氏（九州大学）、下地賀代子氏（沖縄国際大学）の5名によって構成された。各委員は2024年12月に陶天龍氏により提出された学位申請論文を事前に精読したうえで、2025年2月16日（日）に、オンラインにて最終試験が実施された。14時から16時までは公開審査の形で行われ、陶氏による概要の説明（15分）の後、審査委員5名から個別の質疑が行われ（各15分ずつ）、その後、審査委員会全体での審議が行われた（30分）。さらに公開審査に続いて1時間ほど非公開の審査が続行され、より踏み込んだ内容の質疑がなされた。その結果、本論文が本学大学院の定める学位授与基準を十分に満たすこと、また以下に見るように本論文が琉球語学、また言語研究一般に対して十分な学術的貢献をなしていると認められること、そして学位申請者が同論文の記述内容や研究枠組みに関する現状での問題点について真摯に受け止め、そのことが今後の研究の発展につながることを説得的に認めるに至ったことから、審査委員会は全員一致で陶天龍氏に博士（学術）の学位を授与するに相応しいと判断した。

< 論文概要 >

本論文は、沖縄県宮古島の久松地区で話される南琉球宮古語久松方言を対象とした記述文法である。著者の長きにわたるフィールド調査によって得られた一次資料に基づく実証的文法記述であり、当該方言を対象としたものとしては初の包括的な文法研究である。

本論文は次の各章から構成される。以下にその概要を示す。

第1章「久松方言の概要」では、対象方言が話される地域の地理文化的概観（1.1）、系統関係（1.2）、話者数などのデモグラフィックな情報（1.3）に加え、対象方言を含む宮古語諸方言に関する主要な先行研究、また琉球語学における

個別の文法現象に関する先行研究についても整理して提示される (1.4) . さらに、通琉球諸語的にみて特徴的な現象、例えば、複数の焦点助詞形式の共存や形容詞相当形式の形態統語的な自立性、またいくつかの特徴的な音韻現象といった、本論文による重要な発見や中心的な議論について、導入的な言及がなされる (1.9) .

第2章「音声・音韻」では、当該方言の主に分節素音韻論に関する詳細な記述が提示される。まず 2.1 では音素目録が示され、続いて各分節素に関する音声観察と、それらの音韻解釈が与えられる。前舌母音の音響特性を示すためにフォルマント値のプロットを示すなど、必要に応じて、記述の説得性を担保するための工夫がなされている。続く 2.2 では、音節構造とモーラに関する分析と検討がなされる。他の宮古語方言の記述でしばしば用いられる副音節という単位をあえて設定せず、音節スロットの各ポジションに立ちうる分節素に関する *phonotactic* な制約によって、観察される事実の説明を試みている。2.3 では当該方言に観察される形態音韻現象を説明するための形態音韻規則が提示される。音素の削除や挿入、さらには無声化や長音化などの音韻プロセスのみならず、特定の形態素境界での個別的な現象についての解釈についてもこの節で議論される。また、情報量は限られるがアクセント (2.4) やイントネーション (2.5) などのプロソディーに関する現象についても、音響分析によって得られたプロットを示すことで記述的な観察を提示している。

第3章「文法用語の導入」では、本論文で提示する久松方言の文法記述に用いる諸単位の定義を含む、形態統語論的な道具立てが導入される。3.1 では語性 (*wordhood*) に関する概念について Dixon & Aikhenvald (2002), Aikhenvald et al. (2020) といった一般言語学また言語類型論の文脈で信頼性の高い文献を参照しつつ、本論文における文法記述のための枠組みを提示する。そのうえで、3.2 では接語、接辞、語根、語幹といった基本単位を導入し、3.3 では各品詞の概観を提示する。語より大きな単位である句や節、また文のタイプについてはそれぞれ 3.4, 3.5 でその概要を提示し、3.6 では文法関係や項構造に関する情報が整理して提示されている。とりわけ 3.2 においては、宮古語方言の主要な記述文法 (とりわけ下地 2018, 林 2013) における各単位の扱いについて詳細な検討がなされており、本記述文法を、琉球語学の研究文脈に照らして意義のある成果とするための著者なりの努力が伺える。同様に Dixon (2009, 2010) のような記述言語学の代表的なリファレンスや Lieber (2010), Kroeger (2005), Haspelmath & Sims (2010) といった形態論の概説書、また服部 (1950) や Zwicky (1977) などこの分野の古典と呼びうる著作に立ち返って参照するなど、方法論的な妥当性を得るための努力の跡を十分に認め得る。

第 4 章「名詞句」では名詞句内部の構造が示される (4.1, 4.2) とともに, 名詞句の主要部位置を占める形式名詞に関する記述 (4.3.2) に紙幅の多くが割かれている. 4.4 では当該方言の多様な格助詞について, その形式, 機能両面における網羅的な記述が提示されている. とりわけ主格を示す 2 つの形式=*ga* と=*nu* の分布, また与格標識=*n* と方向格標識=*nkai* の使用領域については, 名詞項の意味役割を詳細に検討することで, それらの分布に関する傾向を明らかにしている.

第 5 章「名詞類」では主として各種代名詞形式について, 基本的な機能と形式のみならず, 人称制限や格標示制限などの形態統語的な制約もカバーした詳細な記述が提示される. 5.2 では, 人称代名詞および再帰代名詞の体系性が示される. 例えば, 1 人称代名詞においては後続する助詞の種類によって異なる語幹の形式が選択される. また再帰代名詞には *duu*, *naa*, (*d*)*uuna* の 3 つの形式が確認され, それらはそれぞれ, 配分的複数 (distributive plural) の意味をもつ, 人称制限がかかる, 格標示の制限がかかるといった意味機能的制約によってその体系的差異が記述される. 5.3 では数詞に関する記述がなされ, 数詞語幹と代表的な類別接辞が結合した形式が網羅的に示されている. 5.4 では名詞派生接辞に関する情報が提示される. 指小辞 *-gama* の詳細な用法, 2 つの複数接辞 *-ya* と *-nukja* の使い分けの基準, 動詞化接辞 *-bas* に関する形式, 機能両面での特徴など, コンサルタントとの緊密なセッションによってこそ可能になったであろう観察と分析が提示されている.

第 6 章「代用形式」では指示詞 (6.1) と疑問詞 (6.2) を主たる対象とし, それらの体系性が網羅的に把握しうる形で記述されている. 指示詞に関しては, 先行研究における琉球諸語の指示詞体系の類型を提示したうえで, 久松方言の体系は形式的には 3 系列を有するが, それらのうち中称形に相当する形式が近称形に相当する形式の領域に侵食し, 中称形と近称形概念上の中和を経て, 近称形が失われる過程にあると分析している. また, 疑問詞については疑問代名詞と疑問副詞についてその体系を示している.

第 7 章「動詞」では, まず当該方言の動詞の形態論的構造が図式的に示される (7.1), 動詞語幹と拡張辞 (7.2) について, それぞれの構造的タイプが示される. 具体的には, 動詞語幹には母音語幹動詞と子音語幹動詞が区別され, それら語幹は拡張辞による形式拡張を受ける拡張形とそれを経ない非拡張形に分類される. 拡張形はさらに拡張辞の形式にしたがって, *ɜ* 拡張形, *i* 拡張形, *a* 拡張形に分類され, それら拡張形における拡張辞の出現パターンにしたがって子音語幹は 4 つのサブクラスに分類される. 7.3 では, 金田一 (1950), また Vendler (1967) の古典的な分類を参照しつつ, 当該方言の動詞語幹の語彙的アスペクト

による分類について言及する。7.4 では、当該方言の動詞屈折接辞の体系が提示される。各形式の機能はもとより、各拡張形との接合パターンや形態音韻論規則の適用パターンをふまえて、体系的な整理がなされている。7.5 と 7.6 においては、規則動詞と不規則動詞の分類が示される。不規則動詞は 7.5 で提示される特定の形態音韻規則が適用されない動詞形式として同定されるが、7.6 ではそのように同定された 12 の不規則動詞に関する構造、意味両面での詳細な記述が提示される。7.7 では、当該言語において基本的な動詞派生接辞である、受身・可能・尊敬-*rare*、使役-*simi/-sas*、尊敬・丁寧-*sama*、回避-*gata* に関する簡潔な記述が与えられる。7.8 では補助動詞や軽動詞とともに構成される複雑述語としての両肢述語構文（cf. 下地 2018: 217）について、網羅的な記述が示されている。当該方言においては、この構造を用いることでアスペクトやムード、あるいは動詞によって表される行為や移動の方向性といった概念が明示的に表現されうる。

第 8 章「形容詞」では、形容詞相当形式の語性が最大の焦点になっている。先行研究において繰り返し議論されているように、琉球諸語における形容詞相当形式の形態統語論的なステータスは一面的な基準のみによって同定しえない複雑さを有する。本章では語性に関する一般言語学的また言語類型論的な議論を参照しつつ、他方で琉球諸語研究の知見にも言及しながら、当該方言の形容詞相当形式のさまざまな派生形に関する網羅的な記述を提示することで、この問題について実証的な接近を試みる。本章での議論では、音韻的、形態的、統語的のいずれのレベルにおいても、久松方言の形容詞相当形式は語としての高い自立性を有することを主張するが、一方で記述内容からは連続的な性質も認められ、他の琉球諸語におけるのと同様、当該方言においても形容詞相当形式の記述には単純な一般化を許さない複雑さがあるとみるべきであろう。

第 9 章「助詞」では、第 4 章で扱った格助詞を除く多様な助詞形式について体系的な記述を提示している。9.1 ではいわゆる取り立て助詞が、9.2 では情報構造助詞として複数の主題助詞および焦点助詞が、9.3 では接続助詞が、9.4 では多様な終助詞が、そして 9.5 では（終助詞とは別に）句および節をホストとする助詞としてモーダル助詞というカテゴリーを立て、主として「～のような」といった意味を表す複数の形式についての記述が与えられている。

これらの各章に加えて、2 編の自然談話テキストが付されている。これらは、久松方言話者であるミュージシャンが久松方言で語るインタビュー動画の書き起こしであるが、すでにオンラインメディアで公開されており著作権者からの許諾を得た上で採録している。

本論文は、これまでその包括的な言語記述が得られていない宮古語久松方言の初の実証的記述研究として、まずはその学術的価値を高く評価することができる。上に示したように、本論文は一言語記述として当該言語の形態統語論的領域を十分に網羅するものであり、音声観察、音韻論的な分析、形態統語論的な記述と分析のいずれにおいても方法論的な妥当性を備え、琉球諸語研究のみならず、類型論研究、また一般言語学研究に寄与しうる言語記述として十分に質的水準を満たすものである。

ただし、専門的見地に照らせば、記述内容の細部に問題点をなしとしない。以下に、審議で提示された主要な問題点を示す。

- ㊦ 音韻分析のレベルでは、分節素の成節性と音節スロットの出現可能位置のみによって音配列の規則性を捉えようとしているが、それによって不自然な音節構造を認めざるを得なくなる点は再検討を要する。
- ㊦ この言語の文法記述にとって形態論が重要であることは十分認め得るが、統語論において、とりわけ複文、構文論を欠くのは、本論文の記述文法としての包括性をややもすれば損なうことになる。
- ㊦ 3章において文法記述の枠組みとしての主要な文法用語が導入されているが、本論で頻繁に用いられるにも関わらず導入されていない用語もあり、その点でやや網羅性を欠く点が見受けられる。
- ㊦ 格標示形式の記述が構造的特性というよりは機能による分類・同定に偏っており、その点は記述の手続きとしていささか妥当性を欠く部分もある。
- ㊦ 動詞の形態論記述において、ゼロ形態素 (zero morpheme) と null marking の解釈が判然としない箇所がある。これは本論文の動詞記述の基本的な単位である拡張形を同定する基準になるという点で曖昧さを許してはならない点である。
- ㊦ 形容詞の語性に関する議論においては、参照すべきは文法語 (grammatical word) としての基準であるはずが、音韻語 (phonological word) のそれをむしろ重視するなど、やや恣意的な判断が働いているように見える。
- ㊦ 久松方言における形容詞相当形式を語であるとした強い主張が認められるが、提示されたデータからはむしろその連続的な性質が示され、それこそが当該方言の記述がもたらす琉球語学やより大きな類型論的な議論への貢献となるはずであった。その意味において、一般化を急いでいるように見える点が惜しまれるし、そのようにして不用意な形で誤謬に至る危険性もあり、その点は十分に注意すべきである。
- ㊦ 形容詞が語であるという主張はそれとして、8.2 で提示されている形容詞の

諸派生形式の品詞性がどのようなものであるのかが必ずしも判然としない。

それらとは別に、研究枠組みに関わる重要な点として、自立した未記述方言の記述研究であるにもかかわらず、影響力の大きい先行研究への過度な依存と、他方では他方言の研究に対する一面的かつ公平性を欠く解釈やそのことに起因する不適切な引用が見られる点について厳格な指摘もあった。

しかしこれらの指摘の一つ一つに対し、陶氏は誠実に対応し、真摯な受け止めと、今後の研究活動での修正や、あるいは生産的な見とおしを示した。とりわけ先行研究への言及や引用に関する訂正は、これを直ちに行い、将来の公刊時には訂正した形で発表することを本人とも確認している。またこれらの問題をふまえても、本論文自体の学術的貢献は十分に認められることも確認した。以上の議論を踏まえ、審査委員は陶氏が今後、記述言語学者として信頼される研究をなす将来性を十分に認めると判断し、全員一致で陶氏に博士（学術）の学位を授与するに相応するとの結論に至った。

文献

- Aikhenvald, Alexandra Y, R. M. W. Dixon and Nathan M. White (2020) The essence of ‘word’. In Alexandra Y. Aikhenvald, R. M. W. Dixon and Nathan M. White (eds.), *Phonological Word and Grammatical Word: A Cross-Linguistic Typology*, 1–24. Oxford: Oxford University Press
- Dixon, R. M. W. (2009) *Basic Linguistic Theory, Volume 1: Methodology*. Oxford: Oxford University Press.
- Dixon, R. M. W. (2010) *Basic Linguistic Theory, Volume 2: Grammatical Topics*. Oxford: Oxford University Press.
- Dixon, R. M. W., and Alexandra Y. Aikhenvald (2002) *Word, A Cross-Linguistic Typology*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Haspelmath, Martin, and Andrea D. Sims (2010) *Understanding Morphology*, 2nd edition. London: Hodder Education.
- Kroeger, Paul. R. (2005) *Analyzing Grammar: An Introduction*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Lieber, Rochelle (2010) *Introducing Morphology*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Vendler, Zeno (1967) Verbs and times. In Vendler, Zeno (ed.), *Linguistics in philosophy*, 97–121. Ithaca: Cornell University Press.
- Zwicky, Arnold M. (1977) *On clitics*. Bloomington: Indiana University Linguistics Club. (doi:10.5281/zenodo.7436775)

金田一春彦 (1950)「國語動詞の一分類」『言語研究』15: 48-63.

下地理則 (2018)『シリーズ記述文法 1 南琉球宮古語伊良部島方言』東京: くろしお出版.

服部四郎 (1950)「附属語と附属形式」『言語研究』15: 1-26. 日本言語学会.

林由華 (2013)『南琉球宮古語池間方言の文法』, 博士論文, 京都大学大学院文学研究科.